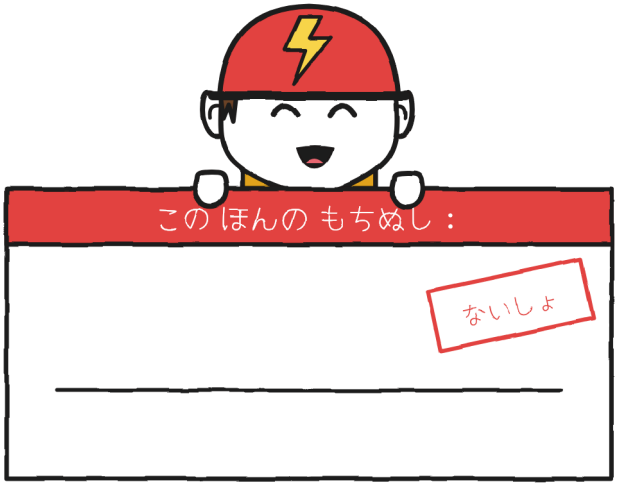


そして さきに よむのは わたし。 —J.

見つけたら、もどしてください。おねがいします。

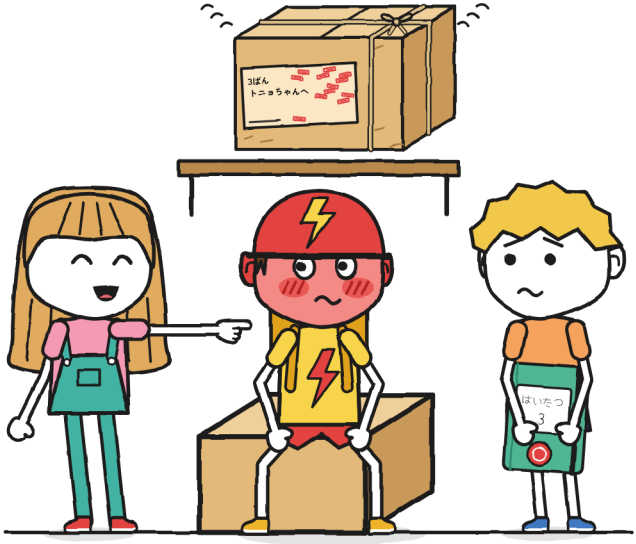
おはなしの なかだけ

このはんこは、お話の中だけのことをしめす：本当の荷物は飛んでもどってこない。本物の自転車に乗るときは、最後のページを見て。 —J.

ありえない はいたつ・3

へんそう おねがい

LinguAula



（グニの ノート）

サイズ **XL**・イラスト小説・13+

ありえない はいたつ・3
へんそう おねがい

シリーズ第3作。前の2作：『このにもつは かみつく』『かみなり前に あける な』

文と絵：LinguAula

日本語版：LinguAula

サイズ XL・イラスト小説・13+

初版：2026

© 2026 LinguAula · info@linguaula.com

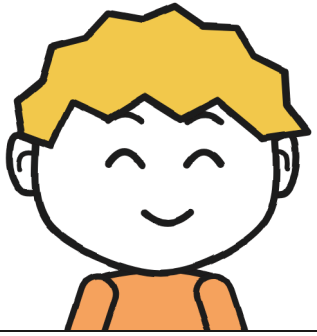
自由にコピーして、学校でも家でも使えます。

フォント：Zen Maru Gothic、Yomogi、Zen Kurenaido、Andika、Patrick Hand、Caveat、Courier Prime（SIL OFLライセンス）。

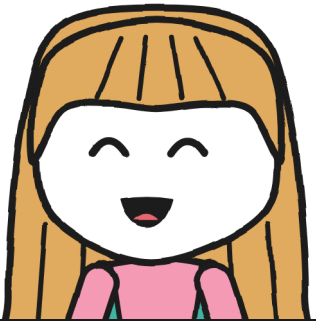
linguaula.comで しょうごとに れんしゅう

この本のしっぴつちゅうに、ケガをした配達員は一人もいない。まっ赤になった人は、いる。 —J.

だれが だれ？



グニ。どようびの はいたつやさん。だれも たのんで いない ものを かく。この ノートは グニの。



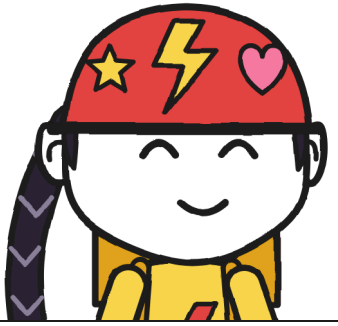
フリータ。みどりで かいて、「J.」と サインする。いつも たすけかたを しっている。それが もんだい。



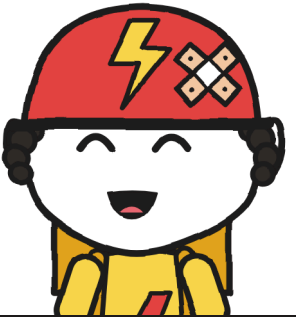
トニョ。じてんしゃで イナズマびんの はいたつを する。じっぷんで とどかなければ タダ。あかく なるのは ぶぶんごと。



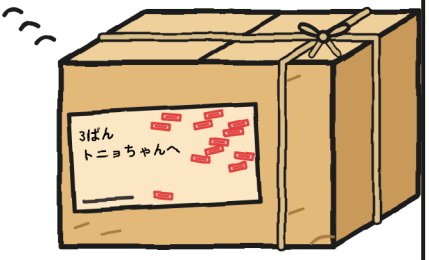
マラさん。「ありえない はいたつ」の てんしゅ。まじょの ぼうしを かぶっている。いうより ずっと おおくを しっている。



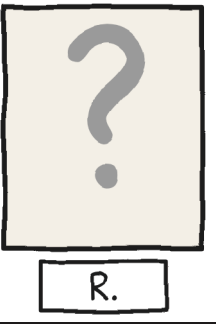
ゾーイ。イナズマびんの 人。いちばん はやい。あだなを つける人。



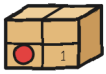
ブルーノ。イナズマびんの 人。1かい パンクした。2ねん まえ。



3ばんの にもつ。うごかすと なる。ラベルには なまえが ひとつだけ。



R.は、だれにも とどけられない にもつを おくるひと。その なまえを だれも いわない。



第１章

チリーン

チリーン。

とても小さな音だった。ほかのものがぜんぶだまりこんだときにだけ聞こえる、そういう音だ。ティースプーンがカップにあたる音とか、おもちゃの自転車のベルとか。音は、もどってきた荷物の棚から聞こえた。店に残っていたぼくたち四人は、ぴたりと動きを止めたので、はんこの火花が一つ落ちる音さえ聞こえそうだった。

あらしは、とっくに行ってしまっていた。フリータは、まだぼくの青いスツールの上に立って、みどりのペンを高くあげていた。線で消した19のとなりに、18と書いたばかりだった。マラさんは、片手をシャッターに向けて、のばしかけたままだった。ぼくは、いちばんいいときでも手のやり場にこまるほうだから、手では何もしなかった。

3番だった。そして、十分でとどかなければタダのイナズマ便で配達をしているトニョは、ヘルメットと同じ色になった。

ノートは新品だった。2番は、たった一度のあらしで使いきってしまった。これは緑色で、すみに店のはんこがおしてある。ぼくが、ちゃんと儀式(ぎしき)をして使いはじめるはずだった：最初のページにタイトルを書いて、新しい言葉を一つ。

グニのはいたつノート3。ないしょ。

「ないしょ」は、先に読むこと。だれにも言わない。 —J.

ぼくは舌(した)を出しながらタイトルを書いて、ななめになっていたときのために、消しゴムをとりにいった。もどってきたら、もうフリータが使いはじめていた。

「助けるために先に使ったの」とフリータは言った。「どういたしまして」

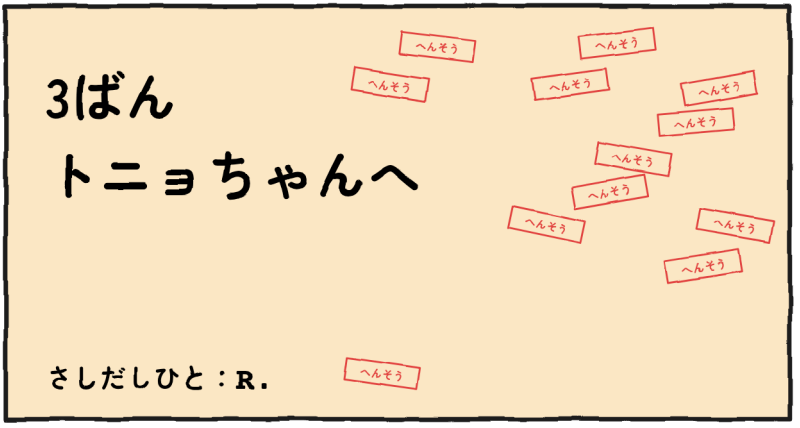
ぼくは、助けてなんてたのんでいない。でも、フリータには、そんなことは関係ない。

あとのことは、いつかフリータ以外の人が読むときのために書いておく。店の名前は「ありえない はいたつ」。店主はマラさんで、魔女(まじょ)だ。むらさき色の帽子(ぼうし)をかぶっていて、はんこを

持っている。そのはんこは、おすと、火を消したろうそくのにおいがする火花をとばす。左の棚には、もどってきた荷物がしまってある。だれにもとどけられなかった荷物だ。きまりはひとつだけ。受けとった人がラベルにきえないインクでサインしないと、荷物は夜明けに、とんで棚の元の場所へもどる。ばんごはんの時間のねこみたいに、きっかりに。荷物は二十こあって、おくってくるのは、いつも同じ人、R.だ。R.のことは、青いノートに、もう六つの手がかりが書いてある。フリータとぼくは、二つとどけた。ドラゴンのたまごと、走りまわるたね。かべには、フリータの字で、みどりで、「のこり18」と書いてある。

フリータは、みどりのメモの人だ。ぼくはグニ、町に来たばかりの子で、荷物のほとんどがまだ箱の中にある。トニョは、イナズマ便の配達員で、黄色いリュックの子だ。土曜日はばつとして、ぼくたちの店で働いている。あらしのあとは、店に自分の場所ができた：ひっくりかえした配達用の箱が、スツールのとなりに。マラさんが、説明もなしにおいたのだ。「いまのところ」とマラさんは言った。「いまのところ」がいつまで続くのか、聞く勇気のある者はいなかった。

3番は、いちばん上の段にあった。ドラゴンのたまごと走るたねがいなくなってできた二つのすきまのとなりで、ラベルがこちらを向いていた。ぼくは読みに近づいた。立ったまま、さわらずに。



タイプで打った三行。3番。トニョちゃんへ。そして一番下に、さしだしひと：R.。名前と最後の行のあいだには、まっ白な紙が、まるごと一面のこっていた。まわりには、「へんそう」のはんこが十二こ。かぞえた。

フリータは、スツールからひょいと下りて、ぼくのとなりに来た。声に出して読んだ：

「トニョちゃ……」

そして、口をとじた。

フリータは、ことばのとちゅうでだまったりしない。ぼくはトニョを見て、わけがわかった。

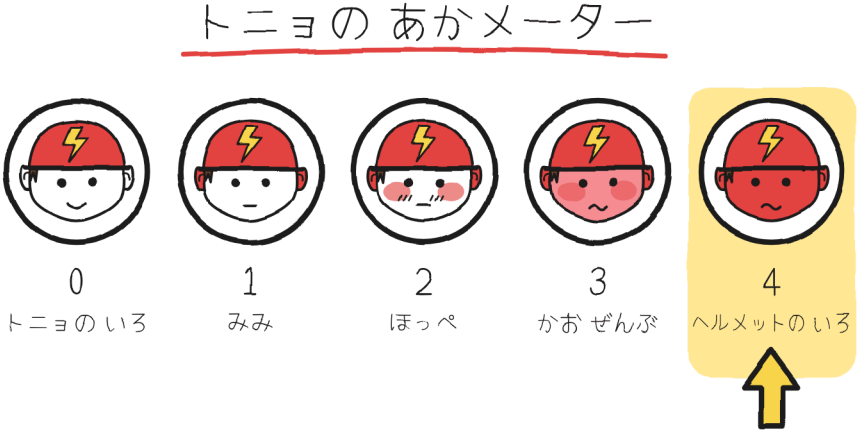
半分だけ読んだ。あとの半分は飲みこんだ。 —J.

いきなりまっ赤になる人もいる。トニョはちがう：トニョは、部分ごとに赤くなる。まず、耳から。つぎに、ほっぺた。それから顔ぜんぶがいっぱいになって、ヘルメットのあごひもまで来る。でも、まだ最後の段(だん)がのこっている。いちばんひどいやつで、顔とヘルメットの区別がつかなくなるときだ。2番のふるえメーターのとき以来、ぼくは、何かが変わるのを見ると、目もりをつけずにはいられなくなった。だから書きとめた。

フリータは、ラベルのまだ読んでいない部分を読もうと、荷物にうでをのばした。

「その荷物は、まてる」とトニョは、ものすごい早口で言った。「何年もまってるんだろ？　じゃあ、あと一日。十日でもいい。イナズマ便はいそがない」

イナズマ便がそんなことを言うのを聞いたのは、これがはじめてだった。



「今夜は何も開けない」とマラさんは言った。「それと、棚には勝手にさわらない」

フリータの手は、ラベルから指いっぽんぶんのところで、宙にういたまま止まった。だれもさわらなかった。なのに、また鳴った。

チリーン。

「ドアだよ！」とフリータは言った。ぼくの知らない声だった。高すぎて、早すぎた。

ドアは、ベラさんが帰ってから、ずっとしまっていた。

わからないことがあると、ぼくはリストを作る。チリーンの容疑者（ようぎしゃ）：

1. ドア。（フリータの意見。しまっていて、風もなく、おす人もいない。）
2. 歩道にとめた、トニョの自転車。イナズマ便のベルつき。（鳴るのはリンリンで、チリーンじゃない。でも、ベルはベル。）
3. ゴムのカエル。（フリータが、すぐに無実だと言った。知っているそうだ。）
4. 3番。

3番は、礼儀（れいぎ）として、いちばん最後に書いた。

ぼくは、たしかめに歩道に出た。カエルは、通りがかりに持っていった。容疑者（ようぎしゃ）は、遠くから取り調べるものじゃない。

もう雨はやんでいた。通りは、ぬれたアスファルトのにおいがして、水たまりのひとつひとつに街灯が入っていた。ドアを開けてしめた：ギィー。トニョの自転車のベルをならした：リンリン！　カエルをおした：キュッ。

ガラスのむこうで、フリータが指をふって、「ちがう」と言っていた。音がするたびに、同じことをした。車のワイパーみたいに、右へ左へ。どれも、ちがった。

ぼくは店にもどって、カエルをカウンターにおいた。トニョは、ぼくがじっと見ているのに気づいて、箱の中で身じろぎした。

チリーン。

ぼくはしゃがんだ。トニョの箱は、棚(たな)の足にもたれかかっていた。

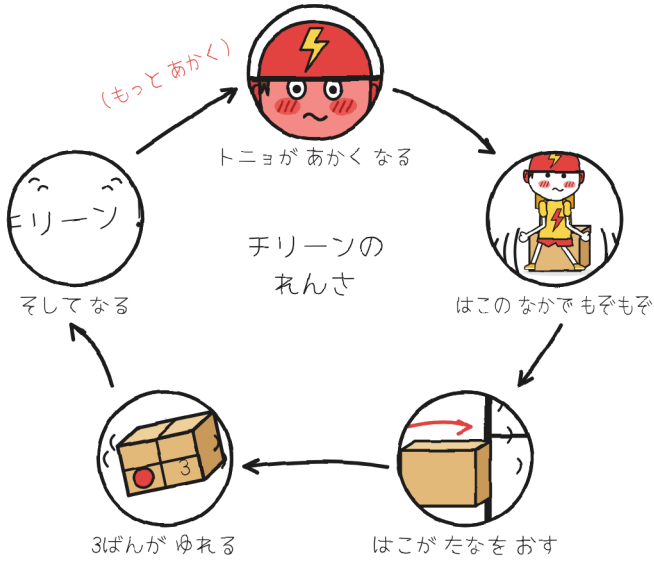
その場で、ひざをついてかいた。まるい絵になった。どれだけ見ても、どこから始まるのか見つからなかったから。

まほうじゃなかった。トニョだった。3番の中には、動かすと鳴るものが入っている。

わたしと同じ。 —J.

トニョは、ぼくの視線(しせん)を棚(たな)の足まで追って、自分の箱を見て、じっとしていることに決めた。

それは、ゴムをのばしたあいだだけ、もった。



じっと。それからもっと、じっと。「じっとしろ」と考えているのが聞こえるほどじっとして、こめかみに汗が一つぶ流れていた。フリータは、もう一分以上しゃべっていなかった。フリータにとっては、水の中で息を止めているのと同じことで、遅かれ早かれ、いちばん口に近いところにあるものをくわえて、浮かびあがってくる。

「トニョちゃんって、だれ？」

トニョは、とびあがった。箱が棚の足をおして、棚がゆれて、3番が、どんなチリーンにもふさわしくないほどの力で

言った。「チリーン！」マラさんは、三つ数える人みたいに、天井を見た。

「ただ聞いただけ」とフリータは言った。「聞いただけで、棚はおせないでしょ」

この一言は、おした。



「ぼくのことだ」とトニョは、自分のスニーカーを見ながら言った。「小さいころの」

あまり小さい声だったので、トニョのいちばん近くのカウンターにいたカエルのほうが、ぼくよりよく聞こえたはずだ。

フリータは口を開けた。しつもんが行列をつくっているのが見えた。日曜の朝のパン屋のように、先頭の子はもうお金を手にしている。それから、まだスニーカーを見ているトニョを見て、口をとじた。

「もうきかない」と言った。

がまんするのは大変だった。足に出ていた：コツ、コツ、コツ、と店のゆかをたたいていた。

聞かなかったことは九こ。ぜんぶ書きとめてある。 —J.

「どうして一度もとどけなかったの？」とぼくはマラさんに聞いた。

「十二回、持っていったよ。」だれも、はんこをかぞえる必要はなかった。「ラベルを見てごらん。通りの名前も、番地も、名字もない。見つけたトニョちゃんは、ぜんぶ試した」

マラさんは、指をおって、記憶（きおく）だけで数えていった。ぼくは、聞くそばから絵にした。カナリア。ほんとうにトニョちゃんという名前で、ラベルをふんだ：ダメ。アントニオさん、71さい。めがねをかけて、紙を二回読んで、「そうだといいんだけどね」と言った。ショーウィンドウを見るような目で、ラベルを見ていた。それから、うんがのボート。わきに名前がペンキで書いてあったが、これもサインしなかった。手がないからだ。

「トニョは？」とフリータが聞いた。

「この前やってみたときは、まだトニョを知らなかった」とマラさんは言って、トニョを見た。「それに、小さいころなんとよばれていたのか、だれも教えてくれなかった」

マラさんは、カウンターの下から、むらさき色のぬのを出して、3番にかぶせた。オウムをねかせるときに、かごにかける

みたいに。それから、トニョに、ちょっと立ってほしいとたのんで、箱を棚(たな)から40センチ遠ざけた。

マラさんの トニョちゃんたち



1. カナリア。
（ラベルを ふんだ。ダメ。）

2. アントニオさん、71さい。
（「そうだと いいんだけどね」）

3. うんがの ボート。
（てが ない。）

「これでいい。好きなだけ動いていいよ」

トニョは帰ることもできた。自転車はドアのところにある。十分で町の反対のはしまで行ける。でも、また腰(こし)をおろした。

なぜかはわからない。でも書いておく。

そして、トニョの箱にはせもたれがないので、ぼくが一つかいた：高くて、少しカーブして、小さなクッションつき。えんぴつで、てんせんで。下に、小さい字で：「せもたれ（ぼくの考え）」

だれもあなたに、せもたれなんてたのんでいない。 —J.

店をしめるとき、トニョは最後までのこって、ヘルメットのひもをとめていた。イナズマ便なら重大なルール違反（いはん）になるほど、ゆっくりと。マラさんは、あかりを一つずつ消していった。むらさき色のぬのは、いちばん上の段（だん）の荷物にかかったままだった。

「マラさん。あした、あの荷物のことで話しに来る。ひみつで」

「この二人は店の人だよ」と、マラさんはふりむかずに言った。

トニョは、ぼくたちを見た。まずフリータを、それからぼくを。ぼくは、スツールの上でせすじをのばした。

「この二人ならいい」とトニョは言った。「でも、イナズマ便の人はだめだ」

外に出て、水たまりの中を、自転車を手でおしながら、遠ざかっていった。

チリーンの持ち主は、もうわかった。あとは、その持ち主がそれをほしがるかどうかだ。

どうすれば助けられるか、わたしにはもうわかっている。 —J.

それがぼくは心配なんだ。

ひとつの おはなし、六つの サイズ

この本には六つのサイズがある。3さいから16さいまでで、ことばは20いじょう。XXS、XS、S、M、Lは同じ絵で、物語を一ページずつ語り、サイズが上がるごとに、細かいところまで話すようになる。XLは小説だ。同じ物語に、グニが心の中で考えても口には出さないことのための場所がある。

CEFRのレベルは目安です。XXS：pre-A1・XS：A1・S：A2・M：B1・L：B2・XL：B2–C1。

どのサイズも、同じチリーン。 —J.

おうちの ひとと せんせいへ

linguaula.comで しょうごとに れんしゅう（Lサイズの練習問題つき）